付加疑問文の関連性モダリティ

河　野　　武

1．序論

英語には、話者の発話態度を表す標識として、次のような付加疑問文がある。

(1) a. She is naive, isn't she?
　　b. She isn't naive, is she?
(2) a. She is naive, is she?
　　b. She isn't naive, isn't she?

(1) は主節と付加語句との極性が反転する逆極性の付加疑問文 (RPT) であり、(2) は極性が一致する同一極性の付加疑問文 (SPT) である。付加語句の表出内容は独立して用いられた疑問文、例えば (1b)、(2a) であれば Is she naive? と、(1a)、(2b) であれば Isn't she naive? と呼応する (Hudson 1975)。もう一方で、付加語句の表すモダリティは顕在化せずに主節 She is/isn't naive の含意として伝達されうる。

先行研究では、RPT と SPT のもつ共通の特性、すなわち同意・不同意の反応を引き出す誘導的疑問文としての役割に注意する一方で、両者の相違点にも目を向けてきた。主立った観察の一つに、RPT は「話者の視点」(the speaker's point of view) を反映するのに対して SPT はそうならないこと (Cattell 1973) が挙げられる。さらに、RPT とは対照的に、SPT には皮肉などの相手への挑戦的な倍音を伴うことが多く (Lyons 1977; Quirk et al. 1985 等)、また相手の発話を反復したり、状況の解釈に基づく話者の予測を提示したりする事実がある (Wierzbicka 1991; McGregor 1995)。

本論文では、蓄積された知見を吟味し、イントネーションによる容飾も視野に入れながら、河野 (1994, 1995, 1996a, 1996b, 1998, 1999) の枠組みに沿って、付加疑問文を関連性モダリティの観点から考察する。

2．＜主張＞成分の特性

付加疑問文は、主節の表す＜主張＞と付加語句の表す＜質問＞から成る。付加疑問文の全体的な機能はどのような主張をどのような形で質問するかにかかっていると言える。以下では、主張成分と質問成分とをいったん分けて観察し、後で統合を試みる。

まず、平均的な見方として、主節の主張は「命題 p が真である」ないしは「(話者は) 命題 p が真

であることを信ずる」という内容であるとする特徴付けがある（Hudson 1975; Quirk et al. 1985 等）。これは RPT には該当するが、SPT では問題を生ずる。例えば、先の（2a,b）のような SPT において、Oh/So のような語句を言外に含ませて話者がある認知状態に至ったことを表明する場合には、「p が真である（と信ずる）」という主張が介在することは明らかだが、アイロニーが意図されている場合には事情は異なる。アイロニーは、相手に帰される考えや発話をやり玉に挙げて、「p が偽である」ことや相手の考えや発話のばかばかしさなどの態度表明を行うレトリックである（Sperber & Wilson 1986）。従って、アイロニー発話としての（2a,b）においては、主節の表す内容は、第一義的（ないしは外面的）には聴者の信念を表し、そこに話者の解釈的な発話態度が重ね合わせられているとみなすべきである。主節の陳述内容を「p が真であると信ずるふりをする」（Hudson 1975: 25）と規定するだけでは不十分であろう。さらに、アイロニーの重層性は、「話者の視点」か「他者（聴者）の視点」か二者択一的に截然と分けようとする Cattell 1973 のような立場を困難にさせる。Cattell によれば、（1a,b）のような「話者の視点」を表す RPT とは対照的に、アイロニー発話の SPT は「他者（聴者）の視点」を表すと分析されることになるが、これでは話者の発話態度の要素を首尾よくすくい取ることはできない。

SPT の主張成分の示す振幅は大きい。一つには、相手の発話の反復の場合がある。次の例を参照。

（3）John: I have translated that Russian sentence for you. It means, 'Necessity is the mother of invention.'
Harry: It means, 'Necessity is the mother of invention', does it? （Cattell 1973: 615）

（ちなみに、上の文脈では RPT の形 doesn't it? は容認されないことに注意。）ここでのエコー的発話は、相手の提示した情報内容の念押しのためである。この場合の情報提示の仕方は、相手が主導し、話者が追随する図式をとる。

第二に、もっと広範に見られるSPT の主張成分のクラスとして、話者による状況の解釈的想定を表す場合がある。次のような例がそれを示す。

（4）Hannah: I know, but couldn't you just accept it as security for a few days' stay here?
Maxine: You're completely broke, are you? （Wierzbicka 1991: 226）

Wierzbicka は上のような主張の内容を 'I say this because of what I see/hear'（p. 226）のように規定している（同様の分析については McGregor 1995 を参照）。そして、このような主張の意図は「当てこすり」、「ニュースをかみしめること」、「耳にしたばかりのことについて自分自身に内省する機会を与えること」、「相手にもっと詳しく話すように促すこと」等にあるとしている。いずれにせよ、一見したところ、上の二つの場合に共通点はないように思われるかも知れないが、Sperber & Wilson 1986 の関連性理論を用いると、ともに「解釈的発話」としてくくることができる。（3）のような反復的発話の場合には、相手の発話の（たいていは忠実な）再現である。（4）のような場合は、相手の発話の解釈的な表示というよりは、むしろ相手の考えの解釈的表示とみなせる。状況から判断しておそらく相手はこのような考えをもっているだろうと想定する場合である。ここでは、So のような推論過程を表す語句が暗示されていると感じ取れる。このタイプには、（4）の例を含めて、相手に最終的な判断を下す権利ないしは資格がある事柄について話者が推測するという形のものが多い。ここでの話者は、遅ればせながら自分の認知状態が相手の認知状態に追いついたかのように装っているようにみえる。

SPT の主張成分の第三のクラスは、すでに触れたアイロニー発話の場合である。アイロニーも相手の発話や考えに（話者の観点から）言及している点で解釈的発話となっている。しかし、上に見た二つのクラスとの大きな違いは、相手の発話や考えに対する話者の強い反発である。相手の発話などから推察するに相手は問題の p を信じていると想定できるが、それが真に支持されうるか否かを相手に改めて問い直すことによって、話者は p が明白に偽であることを相手に訴えようとしている。このように、アイロニーには話者の際だった発話態度が伴うが、この態度はもとをたどれば相手の発話や考えに触発されたものである。この点では、先の二つのクラスと同様に、p を中核とする情報の提示の主導権を相手にゆだね、話者が受け手に廻るという基本的な構図は一応保たれているといえる。しかし、話者の対立的な主張のおかげでこの構図はかなり形骸化してしまっていることも事実である。

このように、SPT の主張成分が相手の発話や考えに帰せられる内容の解釈的陳述を表し、かつ情報提示の力関係は相手が上位に、話者が下位になるとした場合、ひるがえって RPT はこれとどのように対比されるであろうか。まず、RPT の主張内容は話者が真であると信ずる命題を表しているかぎり、特に限定を受けないとみられる。時には、記述的陳述（すなわち事態を直接的に記述する内容）のみならず、アイロニー等に裏打ちされた話者や第三者（厳密には不特定の人物）の考えの解釈的陳述も表しうる。次の例を参照。

（5）Well, there you are, boy. Platform nine－platform ten. Your platform should be somewhere in the middle, but they don't seem to have built it yet, do they? （*Harry Potter*）
（6）Business is business, isn't it? （Hudson 1975: 26）

（5）は、「9 3/4 番線」から発車するという列車に乗るつもりの少年を駅まで送っていった人物の台詞である。そもそもそんな奇妙なプラットホームなど存在するはずもないと思っている人物の発話である。相手の考えに沿ってあえて想定してみた発話内容のばかばかしさを伝えている。(6) は、不特定の人々の考えに言及した解釈的発話の例であり、アイロニーとしても是認の発話としても用いられる。RPT がこのような解釈的陳述を表す場合を含むことで、SPT との境界線がぼやけるのではないかという危惧をいだかせるが、そうではない。その鍵は情報提示の力関係にかかっている。RPT においては、SPT とは対照的に、話者が相手より優位に立つ。例えば（5）では、奇妙な番号のプラットホームが存在しないのは相手の目にも明らかであって、どうして存在しないのかその理由を計りかねているところに、相手にとってもばかばかしく思えるはずの陳述内容を先手を打って提示している。ここでのアイロニーは、究極的には相手の考えに触発されたものではあっても、積極的に話者自身が仕掛けたアイロニーとなっている。相手の考えのばかばかしさはそれに比例して強められている。（6）の場合においても、この発話が自然なのは、事態の核心をついた認識に関して話者が機先を制するからである。相手の認識が先導する場面ではなじまないであろう。

3．＜質問＞成分の特性

付加疑問文の付加語句は縮約疑問文の形を取るが、この要素はどのような＜質問＞の内容を表しているのかに焦点を当ててみたい。まず注意しておかなければならないのは、表出された基底の質問と法不変化詞として文法化された意味ないしは機能との乖離である。付加語句には、一方の極に基底の質問を濃厚に残す場合があり、もう一方の極にモダリティ表現として特殊化してしまった場合がある。

両者を同一スケール上の緩やかな変異として捉えることはたやすいことではない。まずは過去の接近法を素描しておきたい。

まず第一に、付加疑問の本質は、RPT・SPTを問わず、同意や確認を求める誘導的質問にあるとする見方がある（Hudson 1975; McGregor 1995 等）。Hudson は、さらに、RPT は付加疑問で提出された問いに不同意の反応を求めるのに対して、SPT は同意を求めるとしている。両者は主張に含まれる命題の極性を反転させて質問するか否かの構え方は異なるが、いずれも結果的に主節で表される主張を支持するように働きかける形になる。この説明では、SPT がアイロニーを表す場合、同意の対象が相手の想定にあるのか、それとも話者の評価にあるのか曖昧になる。その点に関して、Cattell 1973 は、話者は陳述部分で相手の視点を引用し、質問部分で事実そうであるかどうかを相手に確認しているとみなしている。

第二に、RPT は誘導的質問を表すが、SPT は特殊化されたモダリティを表すとする見解がある。Lyons 1977 は SPT のもつ発語内の力は間接的に質問を表すものの、むしろ感嘆を表すと見ている。また、Quirk et al. 1985 は「皮肉を込めた疑い」（'sarcastic suspicion'（p. 812））のような微妙に質問要素を編入した記述的ラベルを持ち出している。さらに、Bolinger 1989 は SPT の機能として、主張部分で含意された内容を強意化する役割を付与している。このように、最終的にはかなり個別の文脈依存的な付加疑問の意味ないしは機能が生ずるにしても、それらが基底の質問からどのようにして派生したかを原理的に説明することは必要であろう。

第三に、付加疑問のモダリティは、イントネーションを重ね合わせることによってさらに複雑化する。RPT の場合には、付加語句が下降調を帯びると、確信をもって提出した主張内容について相手の確認を求める態度を表すとみなされる。対比的に、上昇調は確信があるわけではない当座の（'tentative' な）主張内容について相手に真偽判断を求める態度を表示するとされる（Halliday 1967; Cattell 1973; O'Connor & Arnold 1973; Lindsey 1985; Quirk et al. 1985）。つまりは、純粋な質問態度が表立つか否かが抑揚によって表し分けられるという主張であるが、疑問文という統語形式に伴う（発語内の力としての）＜質問＞とイントネーションが伝える何らかの質問態度との間に位相のずれが生じていることを感じさせる。文法の表示する＜質問＞とイントネーションの表示する質問態度とは発話の異なった次元で作用するのではないかということである。（この点については 4 節でさらに詳しく議論する。）Quirk et al. 1985 の主張するように、下降調の RPT が「感嘆」の心的態度を表すとした場合、SPT との間に不整合を生ずる。すでに見たように、Lyons 1977 は SPT に「感嘆」の態度を付与しているが、困ったことに、SPT では上昇調が無標の抑揚形であるとされており、説明が破綻するからである。

4．関連性モダリティ

過去の枠組みの抱える困難点を克服すべく、この節では、付加疑問は関連性モダリティを具現する法不変化詞と規定する接近法を提出する。まず、付加疑問に帰される基底の＜質問＞は次のように表示されるものと考える。

（7）i）肯定逆極付加疑問：I ask you whether it isn't the case that not-p.
　　ii）否定逆極付加疑問：I ask you whether it isn't the case that p.
　　iii）肯定同極付加疑問：I ask you whether it is the case that p.

iv）否定同極付加疑問：I ask you whether it is the case that not-p.

RPT の i)、ii）と SPT の iii)、iv）との決定的な違いは誘導的な質問を表すか、中立的な質問を表すかである。i)、ii）ではそれぞれ p ないしは not-p が真であるという話者の信念が含まれており、それへの同意が求められている。ii）では否定が顕在化するが、i）では否定が相殺されて肯定が表層化する。一方、SPT には話者の期待は含まれていないので、主節の陳述内容を成す命題がそのまま質問の対象になっている。RPT においては、話者は主張内容を相手が受け入れることを期待し、それによって認知的な共通基盤を築き上げて会話を展開しようとねらっている。他方、SPT においては、話者は陳述内容の真偽性判断を真剣に求めている。SPT の陳述内容は、相手に帰される発話・考えか、相手に判断を託すことが期待される想定を表すものであった。いずれの場合も、陳述内容が真であるか偽であるかの相手の認定が賭けられているといえる。最初の類の例示であるアイロニー発話のサンプルを次に挙げておきたい。

（8）Funny way to get to a wizards' school, the train. Magic carpets all got punctures, have they? (*Harry Potter*)

そもそも「魔法使いの学校」のごときものに共感できない人物の言である。「魔法の絨毯が全部パンクしてしまっている」などということを本気で主張するつもりか、と相手に問いつめているのである。もちろん話者はそのような主張が滑稽であることを伝えたいのであるが、主張について真摯に質問するモードがあってはじめてそのような心的態度の表出が鮮明になるといえる。SPT のもう一つの類である相手に判断をゆだねる場合も基本的には異なることはない。具体例はすでに（3）および（4）で観察した。これらは、自分の認識が相手に追いついたことを表明するものであった。したがって、これらの場合では、陳述内容に盛り込まれた事態の認識が当を得たものかどうかの判定を相手に求めていると解せる。ここでの問いは話者の認識を定位づけるためのものであるから、性質上話者の利益をかなえるものといえる。相手の判定を待って、自分の（特定的で一時的な）認知的欠乏状態を解消するのが究極的なねらいである。

以上見たように、付加疑問の統語的対応物としての（真偽性判断に関わる）＜質問＞は、独立に用いられた疑問文と共通のものである。本論では、河野（1994, 1995, 1996a, 1996b, 1998, 1999）の枠組みに従って、法不変化詞としての固有の機能は関連性モダリティの表示機能にあるとみなす。関連性モダリティは、発話が関連性をもつか否かに関わる「関連性判断」と、発話が関連性をもつことに聴者が気付いているか否かに関わる「関連性意識の判断」の二つのモードをもつ。音声発話においては、イントネーションが関連性モダリティの中心的なマーカーとなるが、日本語の終助詞の「わ/よ/ね」のようなイントネーションと密着して下位のモダリティを表し分ける項目がある。英語の付加疑問は、日本語の終助詞「ね」と同等に、発話が話者と聴者の双方にとって関連性があるか否かの関連性判断を表すか、あるいは発話が話者と聴者の双方にとって関連性があることに相手が気付いているか否かの関連性意識の判断を表す。関連性の度合いは、発話内容が十分なコンテクスト効果をもつかどうか、かつ発話の形が不当な処理努力を要求するものかどうか、によって決まる。会話の参加者の共通の目標から会話をそらさないようにするために、やりとりの要所要所で意図的に知識の共有化を図り、事柄の認識に関して足並みをそろえることは重要であろう。このような内容の関連性判断・関連性意識の判断であれば顕示的に表示されなくてもどうということはないように思われるかも知れないが、そ

うではない。日本語で「今日はいい天気です」が挨拶表現として不自然なのは、この発話は互いにとって関連性がある（例えば、この文脈でつぼにはまっている）という話者の判断を表す「ね」が表層化しないためである。このようなモダリティ標識を欠いては、相手は発話内容とどのように関わったらよいかとまどいを覚えるであろう。英語の付加疑問も、認知的な意味は空虚であるが、発話の提示および解釈に関わる手続き的な意味は強固にもっている。このようにして、付加疑問の持つ関連性モダリティのモードは次のように規定される。

（9）*Modes of relevance modality*

I. I say that U（or C）is R to SH.

II. I ask you whether U（or C）is R to SH.

III. I say you are aware that U（or C）is R to SH.

IV. I ask you whether you are aware that U（or C）is R to SH.

V.（I say that U（or C）is R to SH; and）I ask you whether U（or C）is R to SH.

VI.（I say you should be aware that U（or C）is R to SH; and）I ask you whether you are aware that U（or C）is R to SH.

（U=Utterance; C=Constituent of U; R=Relevant; SH=Speaker and Hearer）

このうち、I、II、V は関連性判断を表し、残りの三つは関連性意識の判断を表す。また、それぞれは＜主張＞と＜質問＞のモードをもつ。さらに、V と VI は、否定疑問文のニュアンスで、それぞれカッコ内に示した話者の想定への同意を求める質問の場合である。＜主張＞と＜質問＞のモードはイントネーションで表し分けられる。＜主張＞は下降調で、＜質問＞は上昇調で表示される。

上のような規定によって付加疑問文の姿はどのような様相を帯びてくるか、すでになじみの例を改めて吟味してみたい。例えば、RPT の（6）では、「ビジネスはビジネスですよね」と、自分の認識に相手を誘導する構えで発話を行い、この発話の双方にとっての関連性に注意を向けさせている。そして、下降調を帯びる場合には、「この発話は双方にとって関連性がある」（I）、あるいは「この発話は双方にとって関連性があることに相手が気付いている」（III）ことを表す。これらは、それぞれ、発話の関連性ないしは相手の関連性への注視度に対する話者の評価である。上昇調を伴う場合は、そのような関連性判断・関連性意識の判断を相手にゆだねる場合である。判断を相手に譲ることで、自分の主張がもたらす関連性についての自信のなさを表明したり（II）、相手の関連性意識を昂揚させたり（IV）する効果が得られる。誘導的な質問を表す V と VI の場合には、「この発話は双方にとって関連性があると思いませんか」（V）、あるいは「この発話は双方にとって関連性があることにあなたは気付いていないんですか」（VI）といったように、話者の想定を裏切るような事態（特に相手の会話への関わり方）に対抗する形をとる。これらには、何らかの批判や非難の含みが伴う。

次に、SPT の例を見直してみたい。先の（3）は確認のためのエコー的発話であり、（4）は相手の想定を解釈的に提示する場合であった。いずれも、自分が相手の認識に追いついたといった体で発話を行い、この発話の双方にとっての関連性に注意を喚起している。ここでのイントネーション形は典型的に上昇調である。従って、ここに関わる関連性モダリティのモードは、話者の自信のなさと結びついた II か、ないしは相手の関連性意識への怠りなさを喚起する IV が自然なものとなる。これらのモードに介在する質問は中立的なものであり、話者は判断をすっかり相手にゆだねているが、アイロニーを伴う（8）の場合には、話者の判断に同調させるべく、押しつけがましい問いとなる。話者は、

魔法の絨毯が全部パンクしてしまっているとする相手の考えがばかばかしいものであることを伝える自分の発話が、(この文脈で) 双方にとって (高い) 関連性があると思わないのか、あるいはそのような関連性があることにまだ思い至っていないのかについて、批判や非難の気持ちを込めて相手と対決している。ここでの質問態度は、話者の判断が背後に隠されている質問である V ないしは VI がもっとも適合する。

5. 非平叙文に伴う付加疑問

付加疑問は、平叙文のみならず感嘆文、命令文、疑問文とも共起しうる。以下、この順に検討して行きたい。まず、感嘆文に伴う次のような付加疑問について観察してみたい。

(10) What a nice girl she is, isn't she/*is she?

一般に、感嘆文は事物の性質や様態の度合い ('to x-degree Adj/Adv') について主観的な判断を表明するものであり、平叙文の感情的な強意形とみなせる。したがって、付加疑問の性質は平叙文の場合と同一であるとしてよい。ただ、感嘆文は肯定形に限定されるので、RPT の付加語句は常に否定形をとる。また、感嘆文は RPT のみを許し、SPT は受け入れない。これは、感嘆文のもつ自発的・誘導的な性質を反映するためである。ここでの情報伝達のパターンは、明らかに話者の認識が先導しており、相手の認識に追いつこうとしているのではない。

次に、命令文に随伴する付加疑問を見ておきたい。次の例を参照。

(11) a. Come here, will you?
b. Come here, won't you?
c. Come here, can't you?

これらの付加疑問では、話者が命令ないしは依頼した行為を行うことを相手が同意するように働きかけている。命題の真偽性判断への同意を求めているのではない点で平叙文の場合と異なる。(ちなみに、Hudson 1975 は付加疑問が 'I believe that you know at least as well as I do whether the proposition is true' (p. 29) のような真偽性判断に関わる内容を表すとしているが、受け入れがたい。) ここでの付加語句は、主節の形にそれほど拘束されることなく、<依頼>の様々な発話態度を表している。主節は一応 You will come here だと仮定すると、(11c) では別の助動詞が呼応している。さらに、(11a) と (11b) はそれぞれ SPT と RPT を具現しているように見えるが、実はそうではない。これらの付加疑問の違いは<依頼>の様態の違いを投影するものである。同じ<依頼>行為であっても、(11a) よりも (11b) の方が間接的な物言いになっており、そのぶん丁寧さの度合いが増している (Leech 1983)。また、(11c) の付加疑問は、基底の疑問文 Can't you come here? を反映して、「失望」や「当惑」のニュアンスを伝えるものになっている (Quirk et al. 1985)。このように、命令文に伴う付加疑問は、基底の意味として<依頼>を表すが、これに関連性モダリティとしての意味が重ね合わせられる。微妙な発話態度が織り込まれた命令文 (もっと言えば行為指導型 (Directive) の発話行為 (Searle 1975)) のもたらす話者・聴者の双方にとっての関連性に関わる判断の表明である。ここでも、関連性モダリティは (8) で示したモードに従い、関連性判断・関連性意識の判断の<主張>ないしは<質問>のいず

れかがイントネーションによって表し分けられる。

付加疑問と共起する主節の最後のクラスとして、次のような疑問文の場合に触れておきたい。

(12) Are you going now are you?

上のような付加疑問構文には方言差が見られ、アメリカ英語、オーストラリア英語では許容されるが、イギリス英語では一般に許容されないことが知られている。いずれにせよ、原理的に疑問文の主節を排除しなければならない理由はない。(12) のような構文の固有の特徴としては、「押しつけがましさ」の態度 (Bolinger 1989: 124) の介在が挙げられる。これは、(実質的に) 同一の質問が主節と付加部分で反復されることによると思われる。この他の特徴は SPT に共通のものである。すなわち、この種の付加疑問文は、相手の考え (ないしはその反映物としての行為) に触発された解釈的発話を表す (McGregor 1995: 99)。例えば、(12) では、相手がその場を今にも立ち去りそうなことがありありしている場面でのみ自然な発話となる。何の前触れもなく話題を切り出す文脈では適格な発話とはならない。話者が帰属させるべき相手の考えが想定できないからである。このように、主節の内容が相手の考えへの話者の反応を表すとして、では、改めて、主節はなぜ You are going now のような陳述ではなく質問の形をとるのであろうか。陳述の形であれ質問の形であれ予期している肯定の答えに違いはないが、相手の考えにどうしても納得しがたい何かがあって、それが質問を促しているものと解釈できる。質問が単なる「信じがたさ」の態度の表明にとどまるか「皮肉」に及ぶかは文脈に依るほかないが、簡便な記述的ラベルとしては Quirk et al. 1985 が陳述と共起する SPT に付与した 'sarcastic suspicion' (p. 812) は有効であると言えよう。

6. 結論

本論では、付加疑問文の一般的特性と RPT 対 SPT の機能的分化について明らかにした。付加疑問は、基底の＜質問＞ないしは＜依頼＞の意味を根底に残しつつ、法不変化詞として特殊化した関連性モダリティを表す。平叙文に伴う付加疑問には RPT と SPT との対立が見られ、RPT は話者の陳述への同意を求める質問の形をとるのに対して、SPT は相手に帰される考え・発話か、相手に判断を託すことが期待される想定を陳述内容とし、それへの真偽性判断を真剣に求める形をとる。RPT は話者が主導し、話者の判断に相手を同調させるねらいがあり、一方 SPR は話者が相手の判断に追随し、相手の認知状態に追いつくのが目的である。主節に感嘆文や疑問文をとる場合も同様であるが、命令文をとる場合には、付加疑問は＜依頼＞を表し、丁寧さの尺度に応じて様々な統語形式で具現化される。付加疑問の表示する関連性モダリティはあらゆる付加疑問構文に普遍的なものである。このモダリティは、目下の発話が話者・聴者の双方にとって関連性があるか否かの「関連性判断」を表すか、発話が双方にとって関連性があることに相手が気付いているか否かの「関連性意識の判断」を表す。これらの判断は、それぞれ＜主張＞と＜質問＞のモードをもち、前者は下降調のイントネーションで、後者は上昇調で表し分けられる。このように、付加疑問の機能が、基底の発語内の力と関連性モダリティの相乗効果によってもたらされるとみなすことによって、初めて付加疑問の全体像が浮かび上がってくると信ずる。

参考文献

Bolinger, Dwight. 1989. Intonation and its uses. Stanford: Stanford University Press.

Cattell, Ray. 1973. Negative transportation and tag questions. Language 49, 612-639.

Halliday, M.A.K. 1967. Intonation and grammar in British English. The Hague: Mouton.

Hudson, Richard A. 1975. The meaning of questions. Language 51, 1-31.

河野武　1994.「『関連性』とイントネーション」、『大妻レヴュー』第 27 号、75-89。

河野武　1995.「『関連性』とモダリティ」、『大妻レヴュー』第 28 号、75-85。

河野武　1996a.「Bolinger の Profile 理論の再分析」、『大妻女子大学紀要（文系）』第 28 号、39-53。

河野武　1996b.「日本語終助詞の関連性モダリティにおける位置づけ」、『大妻レヴュー』第 29 号、51-63。

河野武　1998.「各種分裂文の関連性特性」、『大妻女子大学文学部三十周年記念論集』、289-306。

Kohno, Takeshi. 1999. Relevance properties of English inversion. Linguistics: In search of the human mind.—A festschrift for Kazuko Inoue, ed. by Masatake Muraki and Enoch Iwamoto, 373-394. Tokyo: Kaitaku-sha.

Leech, Geoffrey. The principles of pragmatics. London: Longman.

Lindsey, Geoffrey A. 1985. Intonation and interrogation: Tonal sutructure and the expression of a pragmatic function in English and other languages. Ann Arbor, Mich.: University Microfilm International.

Lyons, John. 1977. Semantics. Cambridge: Cambridge University Press.

McGregor, William. 1995. The English 'tag question': A new analysis, is(n't) it? On subject and theme: A discourse functional perspective, ed. by Ruqaiya Hasan and Peter Fries. Amsterdam: John Benjamins.

O'Connor, J.D. and G.F. Arnold. 1973. Intonation of colloquial English, 2nd ed. London: Longman.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. A comprehensive grammar of the English language. London: Longman.

Searle, John R. 1975. A taxonomy of illocutionary acts. Language, mind, and knowledge, ed. by K. Gunderson. Minnesota Studies in the Philosophy of Science 7, 344-369. Minneapolis, Minn.: University of Minnesota Press.

Sperber, Dan and Deirdre Wilson. 1986. Relevance: Communication and cognition. Oxford: Basil Blackwell.

Wierzbicka, Anna. 1991. Cross-cultural pragmatics: The semantics of human interaction. Berlin: Mouton de Gruyter.

＜参考資料＞

同極付加疑問のデータ

(1)　'Hungry, are you?'

'Starving,' said Harry, taking a large bite out of a pumpkin pasty. (*Harry Potter*, p. 113)

(2) 'They're saying all down the train that Harry Potter's in this compartment. So it's you, is it?'

(ibid., p. 119)

(3) 'And my name's Malfoy, Draco Malfoy.'

Ron gave a slight cough, which might have been hiding a snigger. Draco Malfoy looked at him.

'Think my name's funny, do you? ...' (ibid., p. 120)

(4) Both Harry and Ron stood up. Ron's face was as red as his hair.

'Say that again,' he said.

'Oh, you're going to fight us, are you?' Malfoy sneered. (ibid.)

(5) 'Who's that teacher talking to Professor Quirrell?' he asked Percy.

'Oh, you know Quirrell already, do you?' (ibid., p. 138)

(6) 'You—Potter—why didn't you tell him not to add the quills? Thought he'd make you look good if he got it wrong, did you? That's another point you've lost for Gryffindor.' (ibid., p. 153)

(7) '... You forget that dog, an' you forget what it's guardin', that's between Professor Dumbledore an' Nicolas Flamel—'

'Aha!' said Harry. 'So there's someone called Nicolas Flamel involved, is there?' (ibid., p. 209)

(8) 'I shouldn't be too friendly to them, Hagrid,' said Filch coldly, 'they're here to be punished, after all.'

'That's why yer late, is it?' said Hagrid, frowning at Filch. 'Bin lecturin' them, eh? ...' (ibid., p. 270)

(9) '... This is Harry Potter an' Hermione Granger, by the way. Students up at the school. An' this is Ronan, you two. He's a centaur.'

'We'd noticed,' said Hermione faintly.

'Good evening,' said Ronan. 'Students, are you? And do you learn much, up at the school?' (ibid., p. 273)

(10) People jostled them as they moved forwards towards the gateway back to the Muggle world...

Mrs Weasley smiled down at them....

'Ready, are you?' (ibid., p. 331)

(11) 'I can't honourably take it,' said Tom, 'because I don't believe the grandfather clock was telling the truth when it struck thirteen.' Oh, said the house coldly, so it's a liar, is it? (*Tom's Midnight Garden*, p. 21)

(12) Being poor like herself, they knew how hard life could be.

'So,' said one of the men, 'you like it here, do you?'

Momo nodded. (*Momo*, p. 14)

(13) 'But this is Momo—my old friend Momo!'

The third young woman raised her eyebrows. 'So she really exists, does she? I always thought she was a figment of your imagination. (ibid., p. 183)

(14) At that moment, Cassiopeia's shell lit up. 'I'LL COME TOO,' it signalled....

... He turned to the tortoise. 'So you want to go too, do you?' (ibid., p. 217)

(15) B: Yes, yes. M m, in Sussex, in my village, they spent the whole of of October building up the bonfire.

A: M.

B: Yes, they probably did it in yours.

A: They had a village one, did they?

B: Yes. (Crystal & Davy 1975: 29)

(16) A: ... and seen the difference between the reality and what's reported, you can imagine what it is.

B: Yes. Well, there you are, you see, that's it.

A: And how the whole thing blow up rather like have you you've read *Scoop*, have you?

B: No.

A: Evelyn Waugh. Because it's just like that. (ibid., p. 36)

(17) A: ... and erm it was dead, and it was lying there. I'd never seen a dead pig before absolutely stiff.

B: Di the children saw it, did they?

A: Oh, they were engrossed, you know. (ibid., p. 40)

(18) B: Go to find out the right seminars to go to, that's what I did when I first came.

A: The right seminars, yes.

B: You know I went to some—.

A: Cos lectures are rather a waste of time, are they? (Svartvik & Quirk 1980: 127)

(19) C: Well, have we decided then the grand tour?

B: Yes.

A: You're staying in here, are you? (ibid., p. 139)

(20) B: Immediately before, I was teaching in a school in Egypt. But before that I was in India.

A: Ooh! And you're an LSE product with statistics or something, are you? (ibid., p. 152)

(21) A: So there we are. Do you like this work here in this department?

B: You were here, were you, once? (ibid., p. 154)

(22) A: ... Thorpe's away, is he?

B: Yes. He's in Greece, Yugoslavia, and such places at the moment. (ibid., p. 155)

(23) He's got an Iraqi mother, and an Indian—or I think it's Pakistani, is it? I'm never very good on my geography between Pakistan and India. (ibid., p. 161)

(24) B: ... After all, your father's a generation younger than my father, isn't he, basically?

A: Well I should think so.

B: Cos your father's now seventy, is he? (ibid., p. 333)

(25) C: My father would have been a hundred and twenty-seven....

B: Now Charlotte's father would have been a hundred, would he, if she'd been he'd been alive? (ibid.)

(26) B: Well I was very intrigued by that story that Sarah Dykes told us. Last couple of years ago, was it? Last year.

C: Last year.　(ibid., p. 350)

(上記のデータの (15)～(26) については、煩雑さを避けるために、原文の細かい音声表記 (特にプロソディ) は捨象し、普通の書記法に改めた。)

データの出典

Crystal, David and Derek Davy.　1975.　Advanced conversational English.　London: Longman.

Ende, Michael.　1985.　Momo, transl. by J. Maxwell Brownjohn.　Harmondsworth, Middlesex: Puffin Books.

Pearce, Philippa.　1976.　Tom's midnight garden.　Harmondsworth, Middlesex: Puffin Books.

Rowling, Joanne K.　1997.　Harry Potter and the Philosopher's Stone.　London: Bloomsbury.

Svartvik, Jan and Randolph Quirk (eds.)　1980.　A corpus of English conversation.　Stockholm: CWK Gleerup.